TOKYO FILMeX 2024

11.23 Sat - 12.1 Sun

第25回東京フィルメックス

会場　丸の内TOEI・ヒューマントラストシネマ有楽町

主催：特定非営利活動法人東京フィルメックス / 助成：文化庁文化芸術振興費補助金（映画祭支援事業）、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】
特別協賛：シネマイニュテイル / 協賛：デジタメ、シマフィルム、コネクション、KODAK / 協力：アテネ・フランセ文化センター、東映、東京テアトル、東京学生映画祭、Festival Scope

提携企画：**Talents Tokyo 2024**
主催：東京都、公益財団法人東京歴史文化財団 アーツカウンシル東京、タレンツ・トーキョー実行委員会 / 提携：ベルリナーレ・タレンツ（ベルリン国際映画祭） / 協力：ゲーテ・インスティトゥート

TOKYO FILMeX 2024 Screening Schedule

23 Sat.		丸の内TOEI 14:55 DIAMONDS IN THE SAND 102min. QA	HTC有楽町 16:10 ユリシーズ Ulysses 73min. QA	丸の内TOEI 18:20 開会式 Opening Ceremony＋ Caught by the Tides(英題) 111min. QA	HTC有楽町 21:00 ベトとナム Viet and Nam 129min.
24 Sun.	丸の内TOEI 10:00 ポル・ポトとの会合 Meeting with Pol Pot 112min.	丸の内TOEI 12:50 サントーシュ Santosh 120min. QA	丸の内TOEI 16:10 ザ・ゲスイドウズ The GESUIDOUZ 93min.	丸の内TOEI 19:05 未完成の映画 An Unfinished Film 107min. QA	
			HTC有楽町 16:10 椰子の高さ The Height of the Coconut Trees 100min. QA		HTC有楽町 21:30 空室の女 Some Rain Must Fall 98min.
25 Mon.	丸の内TOEI 10:50 無所住 Abiding Nowhere 79min.	丸の内TOEI 12:50 何処 Where 91min.	丸の内TOEI 15:05 女の子は女の子 Girls Will Be Girls 118min. QA	丸の内TOEI 18:25 黙視録 Stranger Eyes 126min. QA	HTC有楽町 21:05 ハッピー・ホリデーズ Happy Holidays 123min.
26 Tue.	丸の内TOEI 10:00 ブルー・サン・パレス Blue Sun Palace 116min.	丸の内TOEI 12:40 スホ Sujo 125min.	丸の内TOEI 15:40 空室の女 Some Rain Must Fall 98min. QA	丸の内TOEI 18:40 家族の略歴 Brief History of a Family 99min. QA	HTC有楽町 21:00 白衣蒼狗 Mongrel 128min.
27 Wed.	丸の内TOEI 10:00 黙視録 Stranger Eyes 126min.	丸の内TOEI 12:50 地獄に落ちた者たち The Damned 89min.	丸の内TOEI 15:20 雪解けのあと(仮) After the Snowmelt 110min. QA	丸の内TOEI 18:35 ソクチョの冬 Winter in Sokcho 104min. QA	HTC有楽町 20:55 四月 April 134min.
28 Thu.	丸の内TOEI 10:20 愛の名の下に Mistress Dispeller 94min.	丸の内TOEI 12:40 ポル・ポトとの会合 Meeting with Pol Pot 112min.	丸の内TOEI 15:15 ベトとナム Viet and Nam 129min. QA	丸の内TOEI 18:45 白衣蒼狗 Mongrel 128min. QA	HTC有楽町 21:30 家族の略歴 Brief History of a Family 99min.
29 Fri.	丸の内TOEI 10:40 スホ Sujo 125min.	丸の内TOEI 13:30 愛の名の下に Mistress Dispeller 94min.	丸の内TOEI 15:45 未完成の映画 An Unfinished Film 107min.	丸の内TOEI 18:30 ハッピー・ホリデーズ Happy Holidays 123min. QA	HTC有楽町 21:10 サントーシュ Santosh 120min.
30 Sat.	丸の内TOEI 11:45 ブルー・サン・パレス Blue Sun Palace 116min.	丸の内TOEI 14:30 四月 April 134min.	HTC有楽町 16:10 DIAMONDS IN THE SAND 102min.	丸の内TOEI 18:20 授賞式＋スユチョン Closing Ceremony + By the Stream 111min.	HTC有楽町 21:10 女の子は女の子 Girls Will Be Girls 118min.
1 Sun.	丸の内TOEI 12:20 スユチョン By the Stream 111min.	丸の内TOEI 15:00 何処 Where 91min.	丸の内TOEI 17:20 無所住 Abiding Nowhere 79min.	丸の内TOEI 19:25 地獄に落ちた者たち The Damned 89min.	HTC有楽町 21:25 ソクチョの冬 Winter in Sokcho 104min.

🟦 丸の内 TOEI　🟥 ヒューマントラストシネマ有楽町１

QA =Q&A

- 開場時間は丸の内 TOEI は各回 20 分前、ヒューマントラストシネマ有楽町は各回 10 分前となります。
- 「Q&A」と記載のあるプログラムは上映後に監督などによる Q&A を予定しております。
- オープニング上映『Caught by the Tides(英題)』は日本語字幕のみでの上映となります。
  同作以外は全て英語字幕付きでの上映となります(The opening film, 'Caught by the Tides,' will be screened with Japanese subtitles only. All other films will be shown with English subtitles.)
- プログラムや時刻、Q&A の実施などは事情により予告なく変更となる場合がございます。予めご了承ください。
- 最新情報については東京フィルメックス公式 HP(filmex.jp)をご確認ください。

主催：特定非営利活動法人東京フィルメックス
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(映画祭支援事業)、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】
特別協賛：シネマイニュテイル
協賛：デジタメ、シマフィルム、コネクション、KODAK
協力：アテネ・フランセ文化センター、東映、東京テアトル、東京学生映画祭、Festival Scope
【提携企画 Talents Tokyo 2024】主催：東京都、公益財団法人東京歴史文化財団 アーツカウンシル東京、タレンツ・トーキョー実行委員会
提携：ベルリナーレ・タレンツ(ベルリン国際映画祭)
協力：ゲーテ・インスティトゥート

東京フィルメックス・コンペティション

11.27（Wed.）20:55 / 11.30（Sat.）14:30

四月 April

フランス、イタリア、ジョージア / 2024 / 134分

ジョージアでは、妊娠12週までの処置であれば堕胎手術は本来合法ではあるものの、社会的、あるいは政治的な圧力によって、それが実質的に違法状態になっているという。そんな保守的な社会において、多大なリスクを冒しつつ、他に選択肢を持たない女性たちを戸別訪問し、使命感のみに突き動かされながら、処置や手術を続ける一人の産婦人科医の姿をこの作品は描いている。社会的にも精神的にも孤立し、内面を蝕まれ、次第に心身のバランスを失っていく彼女の姿が、超現実的な描写を交えつつ捉えられていくのだが、その描写の強度や厳密さには誰もが圧倒させられるはずだ。パンデミックのために未開催に終わった2020年のカンヌ映画祭において入選の証である「カンヌ・レーベル」を与えられ、同年にサン・セバスチャン映画祭で最優秀作品賞を受賞した『BEGINING ビギニング』に続くデア・クルムベガスヴィリの長編第2作。本作はヴェネチア映画祭のコンペティション部門で初上映され、特別審査員賞を受賞した。

監督

デア・クルムベガスヴィリ

Dea KULUMBEGASHVILI

トビリシを拠点とするジョージアの監督・脚本家。2014年に初短編作品「Invisible Spaces」がカンヌ映画祭の短編コンペティション部門に選出され、2作目の短編「Léthé」は2016年のカンヌ映画祭監督週間に出品。2020年には初長編作品『BEGINNING／ビギニング』が開催中止となったカンヌ映画祭に選出され、サン・セバスチャン映画祭では最優秀作品賞、監督賞、脚本賞、女優賞の4冠に輝き、トロント映画祭ではFIPRESCI賞を受賞。2021年のアカデミー賞国際長編映画賞のジョージア代表にも選ばれた。

東京フィルメックス・コンペティション

11.25（Mon.）21:05 / 11.29（Fri.）18:30

ハッピー・ホリデーズ Happy Holidays

パレスチナ、ドイツ、フランス、イタリア、カタール / 2024 / 123分

イスラエルのハイファに住む、あるパレスチナ人家族の物語。作品は4つの章に分かれており、それぞれの章が家族内の別の人物を中心に展開し、それぞれが相互に絡み合う構成になっている。国家や社会や文化がどのように強制的な支配を及ぼし、その圧力がどのように個人の人生を変え、破壊するのかについての一連のヴァリエーションにもなっており、一つの家族（あるいは拡大家族）の置かれている状況や人間関係の考察を通じて、イスラエルにおけるパレスチナ人とイスラエル人の分断状況や、軍国主義、あるいは女性に対する家父長主義的な制約といった民族や国家やジェンダーをめぐる深い文化的・政治的な背景が露わにされていく。2009年にイスラエル人監督ヤロン・シャニとの共同監督作品「Ajami」でカンヌ映画祭のカメラドールのスペシャル・メンションを獲得したパレスチナ人監督スカンダル・コプティの2作目の長編作品（単独監督作としては1作目）。本作はヴェネチア映画祭オリゾンティ部門で上映され、同部門で最優秀脚本賞を受賞した。

監督

スカンダル・コプティ

Scandar COPTI

パレスチナのヤファ出身の映画監督・ビジュアルアーティスト。素人俳優を起用した映画制作で知られ、その手法や技術をニューヨーク大学アブダビ校をはじめ、世界中で教えている。長編デビュー作「Ajami」は、イスラエル人監督ヤロン・シャニとの共同監督作であり、2009年のカンヌ映画祭批評家週間で上映され、新人監督賞カメラドールのスペシャル・メンションを獲得。2010年のアカデミー賞では外国語映画賞にノミネートされた。

東京フィルメックス・コンペティション

11.24（Sun.）12:50 / 11.29（Fri.）21:10

サントーシュ

Santosh

インド、イギリス、ドイツ、フランス / 2024 / 120分

©Oxfam

監督

サンディヤ・スリ

Sandhya SURI

ロンドンを拠点に活動するインド系イギリス人の監督・脚本家。2005 年に長編ドキュメンタリー作品「I FOR INDIA」を監督。同作品はサンダンス映画祭の国際コンペティションで上映され、イギリスとアメリカで劇場公開を果たした。2018 年には初の劇映画となる短編「THE FIELD」を監督し、トロント映画祭にて最優秀国際短編映画賞を受賞。2024 年にはカンヌ映画祭のある視点部門にて、劇映画としての長編第一作となる『サントーシュ』が上映された。

サントーシュが警察官として働き始めたのは、殉職した警察官の未亡人が職を継承できるという政府の制度のためだった。慣れない仕事に順応していく中で、彼女はすぐに、昔ながらの警察のやり方を体験し、そこに否応なく参加することになる。性差別、汚職、権力闘争、そしてカースト制度や宗教による社会の分断。レイプされ、殺害され、地元の井戸に捨てられた、いわゆる「不可触民」である少女の死の捜査を、ベテランでカリスマ性のある女性警察官、シャルマ警部の指揮の下で担当することになったサントーシュは、彼女を刺激的な指導者であり、フェミニスト的な連帯の拠り所と見なすようになるが……。映画はあくまでもサントーシュ個人の視点を保ちつつ、彼女が何を受け入れ、内面化し、実践できるか、という感情の旅を描いていく。その過程で社会の腐敗を構造的で世代的なものとして描き出し、その複雑なニュアンスを見事な忍耐と厳格さで探求している。カンヌ映画祭のある視点部門で上映。第97回アカデミー賞国際長編映画賞部門のイギリス代表作品に選出されている。

東京フィルメックス・コンペティション

11.25（Mon.）15:05 / 11.30（Sat.）21:10

女の子は女の子

Girls Will Be Girls

インド、フランス、アメリカ、ノルウェー / 2024 / 118分

監督

シュチ・タラティ

Shuchi TALATI

インド出身の映画監督であり、ジェンダーやセクシュアリティ、南アジアのアイデンティティについての支配的な物語に果敢に挑戦する作品を制作していることで知られる。監督した数本の短編作品で注目を集め、2020 年にはサウス・バイ・サウスウエストの国際短編部門に「A Period Piece」を出品。2021年にはベルリン映画祭のベルリナーレ・タレンツに参加した。『女の子は女の子』（24）は初長編監督作品となる。

模範的な生徒である16歳のミラは、ヒマラヤにあるエリート寄宿学校において、学校全体の行動と学習の基準を設定する責任者である監督生に女子生徒として初めて就任する。野心的で潔癖な性格にも関わらず、彼女は新入生のスリに対して初恋の痛みを覚え、最初の欲望に早々に屈してしまう。彼女の初恋と性欲に対する探求は、しかしながら、母親の介入によって思わぬ方向へと向かう。母親とスリの奇妙な親密さはミラの嫉妬と不安を引き起こし、母と娘の間にぎこちなく、重い溝を作っていく……。映画はインド社会の伝統的な価値観、とりわけ家父長制の陰が彼女たちの人生にいかにまだ影響しているかを検証しつつ、母と娘の間の絶え間ない駆け引きや緊張関係に迫っていく。美化や中傷をすることなく、親密さ、自己承認、裏切りや許しのほんの僅かな瞬間をカメラは捉えている。サンダンス映画祭のワールド・シネマ・ドラマティック部門にて初上映され、主演のプリーティ・パニグラヒの演技に対して特別審査員賞が授与され、同時に観客賞も受賞した。

東京フィルメックス・コンペティション

11.23(Sat.) 21:00 / 11.28(Thu.) 15:15

ベトとナム

Viet and Nam

ベトナム、フィリピン、シンガポール、フランス、オランダ、イタリア、ドイツ、アメリカ / 2024 / 129分

©nicolas-graux

ベトとナムは20代の炭鉱労働者の青年。彼らは粉塵まみれの画一的な職業生活を送りながら、地下何百メートルの暗闇の中で密かな愛を育んでいる。彼らは共に戦争で父を亡くしており、ナムと彼の母は、父のベトコン時代の古い同志バと共に、まだ半分埋まった兵器が点在する森に覆われた中央高原へ父の遺骨を探す旅に出る。ベトは彼らに同行しつつ、ベトナムから密航し国外へ脱出することを計画しているナムの身を案じている……。20年に及ぶ戦争による深い傷がまだ色濃く残る2001年のベトナムを舞台に、恋人同士である二人の炭鉱労働者の姿を通して、戦後のベトナムにおいて、若くそしてクィアであること、そして更にはベトナムという国そのものが抱える困難と苦悩を描く。催眠術のように優しく官能的に撮影された美しい作品でありつつも、その表層の下に眠る深く暗い影の部分を炙り出そうとする象徴性に満ちた作品。長編2作目『樹上の家』(19)で注目を集めた新鋭チューン・ミン・クイの3作目の長編である本作は、カンヌ映画祭のある視点部門で初上映された。

監督

チューン・ミン・クイ

TRUONG Minh Quý

ベトナムのバンメトート出身の映画監督・脚本家。2012年には釜山映画祭のアジアン・フィルム・アカデミーに、2016年にはベルリン映画祭のベルリナーレ・タレンツに参加。2019年には長編 2 作目となる『樹上の家』がロカルノ映画祭の新人監督部門にて上映され、国際的な注目を集める。2021年にはフランス語の短編作品「Les Attendants」がベルリン映画祭の短編コンペティション部門にて上映された。

東京フィルメックス・コンペティション

11.25(Mon.) 18:25 / 11.27(Wed.) 10:00

黙視録

Stranger Eyes（默視錄）

シンガポール、台湾、フランス、アメリカ / 2024 / 126分

©AKANGA FILM ASIA_GRACE BAEY

家族でのピクニックのビデオ映像をじっくりと見ている若い父親。すぐに彼の幼い娘が行方不明になっているということが分かる。このビデオは、若い両親が持っている娘の最新の映像のようだ。程なくして、行方不明の娘の映像が入ったDVDが家族の玄関先に届き始める。誰かがこの家族を長い間監視しており、おそらく娘を取り戻す鍵を握っていることが明らかになる……。ヨー・シュウホァの『幻土』に続く新作長編『黙視録』は、こうして犯罪スリラーとして幕を開ける。シンガポール警察が所有する膨大な数のCCTV映像が駆使され、比較的あっけなく事件は解決するのだが、すでにその頃にはこの作品はスリラーの枠組みをあっさりと超え、現代の孤立と監視文化についての、巧妙で、陰鬱で、瞑想的で、最終的には不可解さを含んだより多層的な物語へと変質を遂げている。大量監視の時代に見る、見られるということはどういうことなのか。私たちの身近にあるこの大きな問いを考察することで、この作品は人間の孤独や脆さを見つめている。ヴェネチア映画祭コンペティション部門で上映。

©AKANGA FILM ASIA_CHRISTOPHER WONG

監督

ヨー・シュウホァ

YEO Siew Hua

ニー・アン・ポリテクニックで映画について学び、卒業後はシンガポール国立大学にて哲学を専攻する。2014年には長編ドキュメンタリー作品「THE OBS: A SINGAPORE STORY」にヘッドライターとして参加。2018年の監督作『幻土』は第71回ロカルノ映画祭にて最高賞である金豹賞を受賞。同年の金馬奨では最優秀脚本賞を受賞し、翌年の第92回アカデミー賞ではシンガポール代表としてエントリーされた。

東京フィルメックス・コンペティション

11.26（Tue.）21:00 / 11.28（Thu.）18:45

白衣蒼狗

Mongrel（白衣蒼狗）

台湾、シンガポール、フランス / 2024 / 128分

©Chiang Wei Liang

監督

チャン・ウェイリャン

CHIANG Wei Liang

共同監督

イン・ヨウチャオ

YIN You Qiao

台湾を拠点に活動するシンガポール出身の脚本家・映画監督。タレンツ・トーキョー、ロカルノ映画祭フィルムメイカーズ・アカデミー、FID キャンパス、金馬電影學院の修了生。短編作品「Anchorage Prohibited」が2016年のベルリン映画祭の短編コンペティション部門で上映され、アウディ短編映画賞を受賞。2018 年には VR 作品「Only the Mountain Remains」がヴェネチア映画祭の VR 部門にて初披露された

タイからの不法移民の青年オームは台湾の山岳地帯の田舎町で老人や障害者たちの介護の仕事をしている。東南アジア各地からの不法移民たちを闇で働かせているボスの下、移民労働者たちの仲介役でもある彼は、ボスと移民たちとの間で板挟みになることも多い。そしてある日、彼が介護をしている老女から、重度の障害を持つ彼女の息子について、ある相談を持ち掛けられる……。現代の奴隷制度ともいえる環境の中で暮らす移民労働者たちの絶望的に悲惨な状況や、彼らの直接のボスよりもさらに上の階層の闇社会の権力によって構築された搾取のシステムの在り方が、説明を極力排した厳密な筆致で描かれていく。フレーム内外で見事に制御された絵画的な構図や、長い沈黙を恐れない編集のリズムの調整も秀逸で、長編監督1作目にして見事な完成度に達している。ホウ・シャオシェンとリャオ・チンソン（ホウ作品の長年の編集者）が製作者として参加。カンヌ映画祭の監督週間で初上映され、初長編作品を対象としたカメラドールのスペシャル・メンションを授与された。

東京フィルメックス・コンペティション

11.24（Sun.）21:30 / 11.26（Tue.）15:40

空室の女

Some Rain Must Fall（空房間裡的女人）

中国、アメリカ、フランス、シンガポール / 2024 / 98分

監督

チウ・ヤン

QIU Yang

中国常州市で生まれ育ち、オーストラリアのビクトリア芸術大学にて映画演出を学ぶ。2017 年の短編作品「A Gentle Night」はカンヌ映画祭の短編コンペティション部門で上映され、パルムドールを受賞。続く2019 年の短編「She Runs」はカンヌ映画祭の批評家週間にて上映され、最優秀作品賞を獲得した。『空室の女』は長編監督デビュー作となる。

40代の主婦、ツァイは人生の目的を失い、大きな精神的崩壊の瀬戸際にいる。映画の冒頭で、彼女は不運な形で年配の女性に怪我を負わせてしまい、入院したその女性の家族から賠償を求められる。この出来事を導入として、私たちは彼女の置かれている状況を目にしていく。夫とは離婚手続き中で、反抗期の娘との間にも深い溝がある。同居中の義母はどうやら認知症を患っており、疎遠になって久しい実父は死期が近いようだ。彼女は、自分の上にのしかかる重荷や憂鬱から逃れようともがいている。この作品は、こうしたツァイの「中年の危機」的状況、ひいては中国の中流階級家庭の機能不全を、4:3の息苦しいフレーミングと撮影監督のコンスタンツェ・シュミットによる美しく憂鬱なイメージによって極めて効果的に語る。映画初出演だという主演のユウ・アイアルの抑えた演技も素晴らしい。カンヌ映画祭の短編部門でパルムドールを受賞した「A Gentle Night」（17）等、一連の短編作品で高い評価を得てきた新鋭チウ・ヤンの長編デビュー作。ベルリン映画祭エンカウンターズ部門で初上映された。

東京フィルメックス・コンペティション

11.26（Tue.）18:40 / 11.28（Thu.）21:30

家族の略歴

Brief History of a Family（家庭簡史）

中国、フランス、デンマーク、カタール / 2024 / 99分

監督

リン・ジェンジエ

LIN Jianjie

バイオインフォマティクス学で学士号を取得後、人間の存在について解読したいという情熱から映画制作の道を歩み始める。ニューヨーク大学ティッシュ芸術学校にて映画制作の修士号を取得。腐敗と虚栄を風刺した短編「A Visit」（15）、法廷での家族の最後の再会を描いた短編「Gu」（17）は多くの国際映画祭で上映された。長編の前に撮影された短編「Hippopotami」は現在ポスト・プロダクション中。『家族の略歴』が長編監督デビュー作となる。

高校の校庭での懸垂中に、内向的なシュオは、同級生のウェイが投げたバスケットボールが当たって落下し、足を負傷する。罪悪感を感じたウェイはシュオに、自宅でテレビゲームをしようと誘う。ウェイの両親と夕食を共にする中、シュオは母親が亡くなったことを明かし、アルコール中毒の父親から受けた虐待をほのめかす。しかしこれはウェイの両親の共感を得るための、シュオにとって最初の巧妙なステップだった。徐々にシュオはウェイの裕福なアパートで過ごす時間を増やし、確実に彼の両親の信頼を勝ち取っていく……。本作が長編デビュー作となるリン・ジャンジェは、見事な語り口の正確さで、目立たない侵入者が潜り込んだ中流階級家庭内における、変化する力学を分析している。完璧な彫刻作品のように、フレーム内のあらゆる要素を徹底的なコントロール下に置きつつ、巧妙で不可解な曖昧さを保ち、スリラー作品のような緊張感を持続させる手腕は見事としか言いようがない。サンダンス映画祭で初上映され、その後にベルリン映画祭でも上映された。

東京フィルメックス・コンペティション

11.27（Wed.）18:35 / 12.1（Sun.）21:25

ソクチョの冬

Winter in Sokcho（Hiver à Sokcho）

フランス、韓国 / 2024 / 104分

©Gareth Cattermole

監督

コウヤ・カムラ

Koya KAMURA

パリで生まれ育った日系フランス人の映画監督。パリ第 7 大学で映画を学んだ後、東京の慶応義塾大学に進学。2007 年にフランスの VIACOM グループでキャリアをスタートし、2008年にはウォルト・ディズニー社にクリエイティブ・プロデューサー兼ディレクターとして入社。2019 年には福島県の立ち入り禁止区域を舞台にした短編作品「Homesick」で監督デビューを飾り、同作は 2021 年のセザール賞にノミネートされた。

スアは韓国北東部の海辺の町、ソクチョにある小さなホテルで働いている。ソウルから数か月前に故郷に戻った彼女は、ソウルでモデルになりたいと思っているボーイフレンドのジュノと半同棲中。しかし、彼女の慎重に構築された日常は、ロシュディ・ゼムが演じる、ある程度名の知れたフランス人アーティスト、ヤン・ケランドの到着によって乱されてしまう。生前にフランス人の父親に捨てられた経験を持つスアは、ケランドと出会い、長い間彼女の中に埋もれていた感情と疑問を再び芽生えさせる……。エリザ・スア・デュサパンによる同名小説の映画化作品である本作は、若い女性のアイデンティティの探求と受容の過程を繊細かつ親密に捉えた作品。冬のソクチョというロケーションの持つ魅力に加え、アニエス・パトロンによる抽象的なアニメーション・シークエンスの導入も大きな効果をあげている。日系フランス人監督、嘉村荒野の初長編作品で、トロント映画祭のプラットフォーム部門での初上映後、サン・セバスチャン映画祭の新人監督部門でも上映された。

OPENING FILM 東京フィルメックス・特別招待作品

11.23（Sat.）18:20

Caught by the Tides（英題）

Caught by the Tides（風流一代）

中国 / 2024 / 111分　配給：ビターズ・エンド

© 2024 X Stream Pictures

監督

ジャ・ジャンクー

JIA Zhang-Ke

1970 年生まれ、中国山西省・汾陽出身。93 年に北京電影学院文学系（文学部）に入学。初長編作『一瞬の夢』が 98 年ベルリン国際映画祭フォーラム部門でワールドプレミア上映され、ヴォルフガング・シュタウテ賞（最優秀新人監督賞）を受賞したほか、釜山国際映画祭、バンクーバー国際映画祭、ナント三大陸映画祭でグランプリを獲得、国際的に大きな注目を集めた。2006 年、三峡ダム建設により水没する古都・奉節を舞台にした『長江哀歌』がヴェネチア国際映画祭金獅子賞（グランプリ）を受賞。

ジャ・ジャンクー監督の長年のミューズであるチャオ・タオ演じる一人の女性の人生の約20年間を、彼女の元を去った一人の男性との関係を軸に描いた作品。物語は2001年に始まり、最初は5年後、次には16年後に時代が移行し、2022年を舞台とする第3章までを通して、主人公女性の感傷的な苦難と、時の経過と共に彼女の自立が深まっていく姿が捉えられている。冒頭の場面は2001年頃に撮影され、映画の終盤に主人公たちが再び大同市に戻る頃には、この古い炭鉱都市が未来への可能性に開かれた完全に別の世界になっているのが印象的だ。最初の2章は過去に様々なフォーマットで撮影された未使用の映像素材が多くの場面で使われており、サウンド版サイレント映画の形式が部分的に援用され、ポップ、ディスコ、伝統音楽等のサウンドトラックに支えられた流動的な編集がなされている。そうしたユニークなハイブリッド映像／音響が各時代の集合的記憶のようなものを喚起させていく様は実に感動的だ。カンヌ映画祭のコンペティション部門でワールドプレミア上映された。

CLOSING FILM 東京フィルメックス・特別招待作品

11.30（Sat.）18:20 / 12.1（Sun.）12:20

スユチョン

By the Stream

韓国 / 2024 / 111分

監督

ホン・サンス

HONG Sangsoo

1960 年、ソウル生まれ。96 年に『豚が井戸に落ちた日』で監督デビューし、バンクーバー映画祭やロッテルダム映画祭などで受賞。2004 年の『女は男の未来だ』がカンヌ映画祭のコンペティション部門に初選出され、『アバンチュールはパリで』（08）から『ヘウォンの恋愛日記』（13）までは 7 作連続で世界三大映画祭（カンヌ、ヴェネチア、ベルリン）に出品されるという快挙を成し遂げる。以降、2024 年の『スユチョン』までに 32 作品の長編映画を監督している。

ソウルの女子美術大学を舞台にしたこの映画は、もうそれほど若くはない大学講師のジョンイムが、かつてはその分野で有名だった叔父のチュ・シオンに大学の演劇祭で学部の学生たちの寸劇を演出させようと大学に招へいするところから始まる。演劇祭の準備が始まり、その過程でシオンはジョンイムの上司で彼の大ファンである女性教授チョンと親しくなっていく……。本作は「A Traveler’s Needs(英題)」に続く今年2作目のホン・サンス監督作品。登場人物たちが食事をし、酒を酌み交わす場面で重要なことが示唆されることが多いホン作品だが、この作品もその例に漏れず、川沿いにある鰻料理店で多くの進展や転回が起こる(また、川沿いの店ではないが、演劇祭の打ち上げの席で学生たちが独白する場面は不意に訪れる感動的なシーンだ)。ジョンイムは織機で繊細なパターンの織物を作る新進の芸術家であり、そのことがこの作品の主題の一つである演劇の考察と共に、作品にもう一つのレイヤーを与えている。ロカルノ映画祭のコンペティション部門で上映され、主演のキム・ミニが最優秀演技賞を受賞した。

東京フィルメックス・特別招待作品

11.26（Tue.）10:00 / 11.30（Sat.）11:45

ブルー・サン・パレス

Blue Sun Palace（藍色太陽宮）

アメリカ / 2024 / 116分

ニューヨークのクイーンズの中国式マッサージ店に住み込みで働くエイミーとディディ。彼女たちはディディの幼い娘が叔母と暮らしているボルチモアで一緒にレストランを開くことを夢見ながら、強固な姉妹的関係を築いている。一方、ディディは建設作業員として働きながら台湾の家族に送金している中年男性のチュンと付き合い始めており、彼と一緒に暮らすことも望むようになる。しかし、予期せぬ暴力行為が旧正月に彼らの生活に侵入すると、彼らの夢は脆くも崩れ去り、痛ましい不在が残される……。本作が初長編監督作となるコンスタンス・ツァン監督は、撮影監督ノーム・リーの力を借りて、この長引く悲しみをざらついた質感と陰鬱な映像で美しく表現する。沈黙が何よりも雄弁に物語を語り、移民であることの孤独、そしてかつて故郷と呼んでいた場所から遠く離れた時に家族やコミュニティのような存在がどれだけの意味を持つかを静かに訴えかけている。カンヌ映画祭の批評家週間で上映され、フレンチ・タッチ賞を受賞した。

監督

コンスタンス・ツァン

Constance TSANG

ニューヨークを拠点とする中華系アメリカ人の脚本家、監督、教育者。コロンビア大学の在学中にロバート・ゴア・リフキンド・ローンチ・ファンドを受賞し、脚本と監督の修士号（MFA）を取得し卒業。2021年の短編作品「Beau」は全米監督協会の第26回学生映画賞（東海岸アジア系アメリカ人カテゴリー）で審査員賞を受賞し、パームスプリングス短編映画祭、アウトフェスト、ブルックリン映画祭、ロサンゼルス・アジア太平洋映画祭、メルボルン・クィア映画祭などでも上映された。

東京フィルメックス・特別招待作品

11.28（Thu.）10:20 / 11.29（Fri.）13:30

愛の名の下に

Mistress Dispeller（以愛之名）

中国、アメリカ / 2024 / 94分

このドキュメンタリー作品では、プロの別れさせ屋の介在を通して、ある中年夫婦と若い女性の三角関係があらゆる角度から精査される。この「愛人払い」ビジネスは、夫婦カウンセリングの一種のバリエーションであり、妻が夫を不倫関係から引き離すために密かに恋愛の第一人者を雇って潜入させるというものだ。本作が三角関係の三つの角のすべてに驚くほど接近できているのは、この作品の主要登場人物である愛人払いのワン・ジェンシー、通称ワン先生の手腕によるところだという。自分の顧客をカメラの前に立たせることができた愛人払いは彼女だけで、資料によれば、残りの角の二つ、つまり夫とその不倫相手の若い女性に関しては、制作チームは当初は現代中国の愛についてのドキュメンタリーを作るという名目で彼らにアプローチしたとのこと（撮影後に、改めて全員がこの作品への出演に同意した模様）。『ストレイ　犬が見た世界』で知られる香港系アメリカ人監督エリザベス・ローの長編2作目。ヴェネチア映画祭のオリゾンティ部門で上映され、アジア映画を対象としたNETPAC賞を受賞した。

©Tom Tang

監督

エリザベス・ロー

Elizabeth LO

香港で生まれ育ち、ニューヨーク大学ティッシュ芸術学校で BFA、スタンフォード大学でMFAの学位を取得。2020年に長編監督デビューを飾ったドキュメンタリー作品『ストレイ　犬が見た世界』はトライベッカ映画祭でプレミア上映され、Hot Docsで最優秀国際長編賞を受賞した他、インディペンデント・スピリット・アワードやクリティクス・チョイス・アワードにノミネートされた。

東京フィルメックス・特別招待作品

11.24（Sun.）10:00 / 11.28（Thu.）12:40

ポル・ポトとの会合　Meeting with Pol Pot（Rendez-vous avec Pol Pot）

フランス、カンボジア、台湾、カタール、トルコ / 2024 / 112分

© Dulac Distribution

監督

リティ・パン

Rithy PANH

カンボジアのプノンペン生まれ。クメール・ルージュ政権による大量虐殺を逃れ、1980 年にパリに到着。高等映画学院（IDHEC）で学ぶ。2003 年の『S21、クメール・ルージュの虐殺者たち』は、1970 年代後半にクメール・ルージュによって組織的に行われた抹殺政策を検証したドキュメンタリー。2013 年には『消えた画　クメール・ルージュの真実』がカンヌ映画祭のある視点部門で上映され、最高賞を受賞。他の代表作に、『Rice People』（97）、『焼けた劇場の芸術家たち』（05）、『エグジール』（16）、『照射されたものたち』（20）等。

ジャーナリストのエリザベス・ベッカーが学者のマルコム・コールドウェルとジャーナリストのリチャード・ダッドマンと共に1978年にプノンペンを訪れた時の記録「When the War Was Over」を大まかに脚色したこの物語は、ポル・ポトとの独占インタビューを前に、3人のジャーナリストたちが役人たちによる厳しい統制下で、政策の施行現場を巡る様子を追う。役人たちが信奉している現実の断片は、時折、表面に亀裂が生じ、彼ら3人は、革命の教義の下で彼らが犯している恐ろしい行為を垣間見ることができるが、肝心のポル・ポトとの会合の実施はずるずると先延ばしにされていく……。色褪せたアーカイブ映像や写真、そして部分的に土人形劇を劇映画に組み合わせることで、リティ・パンは事実に基づくこの架空の物語を長く記憶に残る誠実な作品に仕立て上げている。彼はそのキャリアの大部分を、故郷カンボジアのクメール・ルージュによる大量虐殺の時代を探求することに捧げてきたが、本作はそうした作品群に重要な側面を加えるものになるはずだ。カンヌ映画祭のカンヌ・プレミア部門で初上映された。

東京フィルメックス・特別招待作品

11.25（Mon.）10:50 / 12.1（Sun.）17:20

無所住　Abiding Nowhere（無所住）

台湾、アメリカ / 2024 / 79分

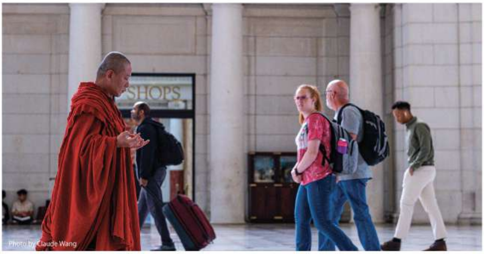

Photo by Claude Wang

監督

ツァイ・ミンリャン

TSAI Ming-Liang

1957 年、マレーシアに生まれる。長編デビュー作『青春神話』（92）がベルリン映画祭でプレミア上映され、第2作『愛情萬載』（92）でヴェネチア映画祭金獅子賞を受賞。続く『河』（96）がベルリン映画祭で審査員特別賞を受賞したことにより、世界的な映画監督としての地位を固める。2012年には「行者」シリーズを開始し、現在までに10作品を制作。各地の映画祭だけではなく、美術館やギャラリーといったスペースでも上映されている。

マレーシア出身の台湾の巨匠ツァイ・ミンリャンの演出、リー・カンションの主演による「行者（Walker）」シリーズの第10作目。9作目の『何処』に続き、アノンも出演している。スミソニアン国立アジア美術館の委託を受けて制作された作品で、同美術館のあるワシントンDCの街やフリーア美術館を舞台に、有名な文学作品『西遊記』の着想源となった7世紀の仏僧玄奘（三蔵法師）の中国からインドへと至る巡礼の旅からインスパイアされた、非常にゆっくりとした修行僧の歩みが捉えられている。ベルリン映画祭のベルリナーレ・スペシャル部門で世界初上映された。

東京フィルメックス・特別招待作品

11.25(Mon.) 12:50 / 12.1(Sun.) 15:00

何処

Where(何處)

台湾 / 2022 / 91分

Photo by Claude Wang

監督

ツァイ・ミンリャン

TSAI Ming-Liang

1957年、マレーシアに生まれる。長編デビュー作『青春神話』(92)がベルリン映画祭でプレミア上映され、第2作『愛情萬載』(92)でヴェネチア映画祭金獅子賞を受賞。続く『河』(96)がベルリン映画祭で審査員特別賞を受賞したことにより、世界的な映画監督としての地位を固める。2012年には「行者」シリーズを開始し、現在までに10作品を制作。各地の映画祭だけではなく、美術館やギャラリーといったスペースでも上映されている。

2022年11月から2023年1月にかけてパリのポンピドゥー・センターにて開催されたツァイ・ミンリャン監督のレトロスペクティブと展覧会「Une Quête」に合わせて制作された「行者(Walker)」シリーズの第9作。『日子』(2020)に出演していたアノンが行者役のリー・カンションと共に主演しており、パリの賑やかな街で行者と出会う自分自身を演じている。本作のプロデューサーによれば、ツァイ監督は「行者」10作目の『無所住』と本作を姉妹作のように考えており、どちらかというと本作の方が順番的には後に位置づけられるのだという。ポンピドゥー・センターの大きな空間の床に置かれた非常に大きな白いキャンバスのような布にアノンが木炭のようなもので何本もの線を描き、その脇を行者が非常にゆっくりと歩いていく。その動きの極度なスローさにも関わらず、両者の邂逅はとてもスリリングだ。

東京フィルメックス・特別招待作品

11.24(Sun.) 19:05 / 11.29(Fri.) 15:45

未完成の映画

An Unfinished Film(一部未完成的電影)

シンガポール、ドイツ / 2024 / 107分

©Yingfilms Pte. Ltd.

©Travis Wei

監督

ロウ・イエ

LOU Ye

1965年、上海生まれ。1994年に初の長編劇映画『デッド・エンド / 最後の恋人』を監督。2作目の『ふたりの人魚』(00)はロッテルダム映画祭にてタイガー・アワードを受賞。続く『パープル・バタフライ』(03)、『天安門、恋人たち』(06)、『スプリング・フィーバー』(09)はすべてカンヌ映画祭のコンペティションに出品。その後の作品に、『パリ、ただよう花』(11)、『二重生活』(12)、『ブラインド・マッサージ』(14)、『シャドウプレイ』(18)、『サタデー・フィクション』(19)等がある。

2019年、物語は10年間電源が入っていなかったコンピューターが起動される場面から始まる。そこには放置された未完の映画が入っており、その映画の監督は主演俳優を呼び出し、制作の再始動を提案する。様々な理由で躊躇していたものの、2020年1月の春節を目前に撮影準備が始まると、主演俳優はクルーに合流している。彼らはすぐに制作に取りかかるが、程なくしてコロナ禍対策のためのロックダウンのニュースが広まり始め、何人かのキャストは荷物をまとめて去っていく。そしてすぐにホテル全体が強制的に封鎖され、主演俳優とクルーは各部屋に閉じ込められてしまう……。本作は、未完に終わったクィア映画を完成させるために再集結した映画制作チームを描いたドキュフィクション作品。映画制作の過程とパンデミックを生き抜く過程が、感染拡大で制作が中断し、全員がホテルで隔離されるという場面で結び付けられる。そこからフィクションと現実の境界が更に曖昧になっていくが、それでも溢れ出る真摯さや真実味こそがこの作品の真骨頂だろう。カンヌ映画祭にて特別上映作品として上映された。

東京フィルメックス・特別招待作品

11.26（Tue.）12:40 / 11.29（Fri.）10:40

スホ

Sujo

メキシコ、アメリカ、フランス / 2024 / 125分

麻薬取引の温床であるミチョアカン州の田舎で、シカリオ（殺し屋）の父のもとに生まれたスホは4歳で孤児になる。人里離れた丘の上に住む叔母ネメシアは、カルテルの掟によって命を狙われることになった幼いスホを匿い、彼女と姉妹的な関係にある友人ロザリアと、その二人の息子だけを伴って彼は育てられる。成長するにつれ、彼は親から引き継いだ血まみれの遺産について知るようになるが……。本作は暴力の連鎖の中で、一人の少年が忍耐強く自分の道を見つけようとするまでを描く成長物語。直接的な暴力は画面には殆ど映らないものの、私たち観客はそれが差し迫った避けられない前兆のように常に潜んでいるのを強く感じるだろう。リアリズムと抒情性を効果的に融合させながら、カルテルの暗躍を背景にした暴力と世代間のトラウマが巧みな脚本によって描かれている。アストリッド・ロンデロとフェルナンダ・ヴァラデスの映画作家デュオによる『息子の面影』（20）に続く長編作品。前作に続き、本作もサンダンス映画祭で上映され、見事に審査員特別賞を受賞した。

監督

アストリッド・ロンデロ&フェルナンダ・ヴァラデス

Astrid RONDERO & Fernanda VALADEZ

アストリッド・ロンデロとフェルナンダ・バラデスは、メキシコの脚本家、監督、プロデューサー。15年以上に渡る共同作業を通じ、長編映画２本「The Darkest Days of Us」（17）と『息子の面影』（20）、短編映画３本「Of This World」（10）、「In Still Waters」（11）、「400 Bags」（14）を制作してきた。『息子の面影』は、サンダンス、サン・セバスチャン、チューリヒ、テサロニキ等の映画祭で受賞し、ゴッサム賞では最優秀国際映画賞を受賞。『スホ』は、彼女たちにとって３作目の長編映画となる。

東京フィルメックス・特別招待作品

11.27（Wed.）12:50 / 12.1（Sun.）19:25

地獄に落ちた者たち

The Damned

イタリア、ベルギー、アメリカ、カナダ / 2024 / 89分

1862年、北軍の志願兵部隊が北西部の辺境を偵察する任務を与えられる。彼らは、若者、年配者、神を恐れる者、神を恐れない者など、あらゆる階層の多様な集団だった。彼らの多くに共通しているのは、銃を撃った経験が殆どなく、ましてや人を殺したことなどないということだ。ただ、彼らが長い間本当に戦わなければならない敵は、退屈であり、北西部の厳しい気候だった。彼らは神の存在に疑問を抱き、善と悪の概念について議論し、高まる幻滅感を理解しようとするが……。これまで20年以上に渡ってアメリカの見過ごされてきた辺境を描き続けてきたイタリア出身の映画監督ロベルト・ミネルヴィーニが、同国の南北戦争に目を向けた最新作。アメリカという国のアイデンティティを形作ってきた信仰、夢や希望、階級、そしてコミュニティといった要素が、これまでのミネルヴィーニの作品と同様に、この時代劇でも少し形を変えて探求されている。カンヌ映画祭のある視点部門で初上映され、同部門で監督賞を受賞した。

©Olga-Prudka

監督

ロベルト・ミネルヴィーニ

Roberto MINERVINI

アメリカを拠点に活動するイタリア出身の映画監督。2007年よりテキサスを舞台に映画制作を開始し、アメリカ南部の農村地域を描いた「The Passage」（11）、「Low Tide」（12）、「Stop the Pounding Heart」（13）の３本の長編を監督。その後はルイジアナに舞台を移し、カンヌ映画祭ある視点部門で上映された「The Other Side」（15）やヴェネチア映画祭コンペティションで上映された「What You Gonna Do When the World' s on Fire?」（18）の２本の長編を監督した。

東京フィルメックス・特別招待作品

11.24(Sun.) 16:10

ザ・ゲスイドウズ

The GESUIDOUZ

日本 / 2024 / 93分　配給：ライツキューブ

©2024「ザ・ゲスイドウズ」製作委員会

監督

宇賀那健一

UGANA Kenichi

1984年生まれ、東京都出身。ファンタジーでパンキッシュな作風がトロント国際映画祭、シッチェス映画祭、ブリュッセル国際ファンタスティック映画祭、ポルト国際映画祭、スラムダンス映画祭、ファンタスティック映画祭、モントリオールヌーヴォーシネマ、トリノ映画祭などで評判を呼ぶ。代表作は『悪魔がはらわたでいけにえで私』『異物 - 完全版 -』『転がるビー玉』など。最新作として国際共同製作のNYロケのロマンスコメディが撮影済み、台湾と日本の国際共同製作のホラー映画の撮影が控えている。

26歳になったばかりのハナコは鳴かず飛ばずのバンド「ザ・ゲスイドウズ」でボーカルを務める。一向に売れる気配のない彼らの体たらくを見かねた彼らのマネージャーは、厄介払いを兼ねて、移住支援制度を活用して彼らを田舎へと送り込もうとする。27歳で早逝したロック・レジェンド達に自らを重ねつつ、ハナコは27歳で死ぬこととグラストンベリー・フェスティバルへの出演を自らに誓い、新しい環境で新しい曲を書こうとするが……。パンク音楽とホラー映画にオマージュを捧げる本作は、アキ・カウリスマキ監督の「レニングラード・カウボーイズ」シリーズを彷彿とさせる、とぼけた物語展開が魅力のファンタスティック・ロック・ムービー。だが、この作品が私たち観客の心を最終的に震わせるのだとすれば、それはジャンルを問わず、あらゆるポップ・カルチャーの持つある種の本質をこの作品が正確に突いているからだろう。大衆文化における「しょうもないもの」に人生を変えられた経験を持つ全ての人に観てもらいたい作品だ。トロント国際映画祭のミッドナイト・マッドネス部門でワールドプレミア上映された。

東京フィルメックス関連企画

12.2(Mon.)-12.4(Wed)　会場：アテネ・フランセ文化センター（東京・御茶ノ水）

EVENT 『Some Strings』特別上映会

12月2日(月)

昨年末にイスラエルによる空爆で亡くなったリファート・アラリール氏（ガザ市出身の作家で教育者）が残した詩「もし私が死ななければならないのなら〈If I must die〉」のもとに、パレスティナへの連帯を示すために各国の映画監督や映像作家が1～6分の短編映画や短編映像を作り（あるいは提供し）、それらを繋いだものを各地の映画祭やアートセンターで上映していくという現在進行中のプロジェクト。日本からは杉田協士と山角洋平が参加。

上映作品：『Some Strings』2024年9月版

（Various Directors / DCP / 英語・フランス語字幕版 / 日本語字幕なし）

全6プログラム

プログラム 1（49分）／プログラム 2（48分）／プログラム 3（56分）
プログラム 4（54分）／プログラム 5（34分）／プログラム 6（43分）

EVENT 現代ドイツ映画作家シリーズ（特別編）ペーター・シャモニ Peter Schamoni（1934-2011）日本未公開作上映

12月3日(火)

「オーバーハウゼン宣言」（1962）の参加者としてニュー・ジャーマン・シネマの誕生に関与したドイツの映画作家ペーター・シャモニ Peter Schamoni（1934―2011）は、『狐の禁猟期』（1966）『哀愁のトロイメライ』（1981）『春のシンフォニー』（1983）などの劇映画と並行してアートドキュメンタリーの分野でも貴重な作品を残した。1991年の作品『マックス・エルンスト放浪と衝動』が今秋日本でも公開されている。今回はシャモニ監督がコロンビアの世界的アーティスト、フェルナンド・ボテロ Fernando Botero を追ったアートドキュメンタリー『ボテロ、メデジンに生まれて Botero Born in Medellin』（2007）を日本初上映。上映後、同作品の撮影を担当したエルンスト・ヒルシュ、コンラート・ヒルシュ親子を招いてトークを実施する。

上映作品：『ボテロ、メデジンに生まれてBotero Born in Medellin』

ペーター・シャモニ監督（2007年/90分/デジタル/日本語字幕）

EVENT アモス・ギタイ監督「家」三部作一挙上映

12月4日(水)

イスラエル第二世代の映画作家アモス・ギタイ監督が、エルサレムにある一軒の家の運命をパレスティナ・イスラエル問題のメタファーとして記録し続けた「家」三部作を一挙上映。

『家』（1980年/51分）

パレスティナ人の家族が、デイル・ヤシンの虐殺（1948年4月）など戦火を恐れて避難した西エルサレム。ドルドルヴェドルシャフ通りにあった一軒の「家」は、1948年5月に独立したばかりのイスラエル政府に接収され、急増したユダヤ人移民たちに住居として割り当てられた。その30年後、今はユダヤ人の経済学の教授が所有し、増改築を進めている。石材が切り出される西岸ヘブロン近郊の石切場、占領地からの出稼ぎ労働者の石工、現在の所有者の教授、イスラエル独立以降の通りの歴史を見て来た近隣の人々、そして「家」の元所有者だったパレスティナ人医師ダジャーニ博士。ユダヤ人国家としてのイスラエルの根源にある解消不能な矛盾を静かに提起するギタイの第一作は、イスラエル当局によって上映・放映禁止処分を受け、ギタイは故国イスラエルを離れることとなる。

『エルサレムの家』（1998年/89分）

『家』の制作から約20年。ギタイは「家」の元所有者だったダジャーニ博士の息子（制作当時東エルサレムで開業）とその娘に話を聞く。一方でかつてイスラエル政府に接収されたドルドルヴェドルシャフ通りの「家」の現在の住人達は、それぞれに流浪の民だった記憶を抱えながら、どこかイスラエル国民であることに馴染めないのか、ヘブライ語ではなく英語やフランス語でインタビューに応じる。考古学の発掘現場では聖書の記述と矛盾する遺跡の調査中、その作業員は出稼ぎのパレスティナ人達だ。武器としてのキャメラが数千年に渡り諸民族の十字路だった歴史都市エルサレムの並列する地層を定点観察する中に、1993年のオスロ合意以降の和平交渉の限界があらわになり、今日から見るとパレスティナの地の不穏な将来を予見した作品とも言える。

『ニュース・フロム・ホーム、ニュース・フロム・ハウス』（2006年/97分）

和平交渉が完全に行き詰まり、イスラエル政府がガザと西岸の占領地を隔離する分離壁を建て始めた頃、ドルドルヴェドルシャフ通りでは「家」の新築や増改築が進む。流麗なステディカム撮影のキャメラは物理的・精神的な分断に抗うように壁を超え、西岸ではかつて『家』では名を名乗らなかった石工のユーセフに再会、さらには国境を超えて「家」のかつての住人ダジャーニ家の足跡を訪ねてヨルダンの首都アンマンに向かう。ギタイを歓待する老女は、難民としての亡命先の中東各国で女性の権利の獲得に邁進した人物だった。一方、その彼女が育ったドルドルヴェドルシャフ通り「家」の10年前の住人達は今もそこに暮らし、未来に漠然と不安を感じつつ、イスラエル社会に居場所を見出しつつある。一軒の家の歴史に凝縮された歴史に未だ微かに残る共存の可能性を見出したかに見えた映画はしかし、西岸占領地で和解を不可能にしているのはなんなのかの、決定的な現実を突きつける。

東京フィルメックス・メイド・イン・ジャパン

11.23(Sat.) 16:10

ユリシーズ

Ulysses

日本、スペイン / 2024 / 73分

© ikoi films

この映画は3部に分かれている。第1部では、マドリードで8歳の息子と二人きりで暮らすロシア人の母親に焦点が当てられる。続く第2部では、一人の日本人男性がバスク人の若い女性と知り合う。2人は共に時間を過ごし、彼女は彼を友人たちに紹介する。そして第3部では、舞台は日本に移され、若い男性がお盆の時期に実家に帰省し、亡くなった祖父の霊を迎えるための準備を祖母と共に進めていく……。本作は、そのタイトルが示す通り、ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』の形式的なアイデアを取り入れた作品で、更には『ユリシーズ』が大きく依拠しているホメロスの『オデュッセイア』を大まかに翻案したものだという。無論ここではギリシャの英雄の困難な帰郷の旅がそのまま語られているわけではない。むしろ「家」や「帰属」といった概念を巡って各々の物語が展開されており、世界の様々な場所での日常生活の断片が曖昧さを残したまま控えめな筆致で描かれている。本作はマルセイユ国際映画祭で初上映され、続いてサン・セバスチャン映画祭でも上映された。

監督

宇和川輝

UWAGAWA Hikaru

スペイン、サンセバスチャンの Elías Querejeta Zine Eskola で フィルムメーキング・コースの修士課程を修了。2023 年、サンセバスチャン国際映画祭映画作家助成レジデンスプログラム Ikusmira Berriak に選出される。その後、初長編映画『ユリシーズ』がマルセイユ国際映画祭、サンセバスチャン国際映画祭に正式出品される。現在は東京を拠点に映画制作をしている。

東京フィルメックス・メイド・イン・ジャパン

11.27(Wed.) 15:20

雪解けのあと(仮)

After the Snowmelt(雪水消融的季節)

台湾、日本 / 2024 / 110分　配給:ドキュメンタリー・ドリームセンター

本作は、ルオ・イーシャン監督の親友チュンが、2017年に恋人のユエとネパールでのトレッキング中に亡くなったことに端を発している。チュンとユエは降雪のために47日間山中の洞窟に閉じ込められたが、チュンは救出の3日前に亡くなり、ユエだけが生き残る。台湾に戻ったユエはチュンと交わした約束を、元々この旅行に加わる予定だったルオに伝える。生き残った者は自分の体験を語らなければならないという約束だ。その言葉に応えるため、ルオはカメラを手に取りネパールへ向かい、チュンの足跡を辿る旅に出る……。この作品は一人の若者が初めて経験する深い喪失と格闘し、その意味を探る過程を辿るドキュメンタリーであり、同時に成長物語でもある。あくまでも主観に徹した一人称の作品だが、映像のフレーミングやその選択、そして編集のリズムにも非凡なセンスを感じさせる。親友が亡くなる前に残した手紙の使用も効果的で、死者と生存者の間の複雑な関係を親密に浮かび上がらせていく。山形県の豪雪地で作品の構成・編集を再考するレジデンシーに参加した「メイド・イン・ジャパン」である。

監督

ルオ・イーシャン

LO Yi-Shan

台湾生まれ。現代文学、文化人類学、社会科学に影響を受け、大学時代からフリーランスのライター、映画評論家として活動。10代の頃から台湾の亜熱帯山林にみられる人間と他の生き物の共存関係にひきつけられ、野性の美しさと複雑さを描くことは映画制作の動機となってきた。『雪解けのあと(仮)』は初の長編ドキュメンタリー作品である。

東京フィルメックス・メイド・イン・ジャパン

11.24（Sun.）16:10

椰子の高さ The Height of the Coconut Trees

日本 / 2024 / 100分

監督

ドゥ・ジエ

DU Jie

1976年に生まれ、2001年に北京電影学院の撮影学科を卒業。映画撮影監督として撮影した作品が成功を収め、広く注目を集めた。撮影した映画は、ベルリン国際映画祭、釜山国際映画祭、東京国際映画祭、台湾金馬奨、香港アジア映画大賞、中国金鶏奨などにノミネートされた。2024年にアメリカ撮影監督協会（ASC）に加入、同年監督として長編デビュー作『椰子の高さ』を完成させ、その作品は釜山国際映画祭のニューカレンツにてノミネートされた。

物語は2組のカップルを中心に展開する。一人の青年は写真家の恋人を自殺で亡くしてしまうが、彼女との生前と死後のエピソードが、時間軸をずらす形で物語に織り込まれていく。もう一つの中心になるのがペット関係の店で働く女性と日本料理店で働く男性の関係を描いた物語で、料理中の魚の内臓の中に指輪を偶然見つけたことをきっかけに二人は結婚を計画するが、ハネムーンの直前に彼らの関係は破局を迎える……。本作はチェン・スーチェン、グァン・フー、ニン・ハオといった名だたる監督たちの下で20本以上の映画を撮影してきたベテラン撮影監督のドゥ・ジエの長編監督デビュー作で、脚本、撮影、編集、美術もドゥ自身が担っている。20年初頭にコロナ禍が始まった際に日本で家族と休暇を過ごしていたドゥはそのまま短編シナリオを日本で書き始め、そのうちの一つを映画化したのが本作だという。東京で大部分が撮影されたチェン・スーチェン監督作『唐人街探偵 東京MISSION』(21)の主要な制作スタッフの多くが今作にも関わっている。釜山国際映画祭のニューカレンツ部門で初上映された。

東京フィルメックス・メイド・イン・ジャパン

11.23（Sat.）14:55 / 11.30（Sat.）16:10

DIAMONDS IN THE SAND

日本、マレーシア、フィリピン / 2024 / 102分

監督

ジャヌス・ヴィクトリア

Janus VICTORIA

フィリピンのマニラを拠点とする脚本家・監督。フィリピンの放送局やデジタルプラットフォーム向けに時事問題のドキュメンタリーを制作しながら、人々と場所の関係を探求している。これまでに『マニラの神話』を含む6本の短編番組や、東京のアパートでの孤独死に関するドキュメンタリー番組『沈黙との遭遇』を制作。『Diamonds in the Sand』は長編映画としての監督デビュー作となる。

離婚して東京で一人暮らしをしているサラリーマンのヨージ。彼のことを心配してくれる母親もついに他界してしまう。意味のある人間関係は殆ど残っていないため、生きる意味がないという現実に彼は直面する。娘を養うために日本で介護士として働くミネルバとの偶然の出会いは、ヨージに自分の状況を新たな視点で見るように促す。そんな中、名前も知らない隣人の老人の腐乱死体が発見され、その死は孤独死と判定される。同じ運命を辿りたくないヨージは、用心深さを捨て、ミネルバを追ってフィリピンの首都マニラに向かうが……。孤独死という日本の現象を探求することから始まった本作は、2013年のタレンツ・トーキョー（当時はタレント・キャンパス・トーキョー）の受賞企画であり、監督兼脚本家のジャヌス・ヴィクトリアにとっては初の長編作品となる。どんな作品でも必ず光る演技を見せるリリー・フランキーがここでも抜群の存在感を発揮しており、ベテラン撮影監督の芦澤明子による、日本とフィリピンの空気感をそれぞれに映し出す映像も魅力的だ。

TOKYO FILMeX 2024 Ticket Information　11月2日(土)12:00 pmより発売

会場／丸の内 TOEI SCR1

購入方法：丸の内 TOEI 劇場 HP / 劇場窓口で購入

券種	前売券	会期中券
料金	一般　1,500円　U-25割　1,100円	一般　2,000円　U-25割　1,500円
販売期間	11/2(土) PM 12:00〜11/22(金) 19:00	11/23(土) AM 10:00 〜
取り扱い	丸の内TOEI	

劇場HP：https://toeitheaters.com/theaters/marunouchi/
座席選択可能。購入・発券手数料は0円です。
特別興行のため、各種割引およびご招待券などはご利用頂けません。
車椅子でご来場の方は(車椅子スペースでの鑑賞をご希望の場合でも)1席分のチケットをご購入頂いた上で、
劇場までご連絡ください(https://toeitheaters.com/theaters/marunouchi/access/)。
なお、車椅子スペースには限りがございますので、状況によりお席への移動などをお願いする場合がございます。

会場／ヒューマントラストシネマ有楽町 シアター１（有楽町イトシア・イトシアプラザ４階）

購入方法：ヒューマントラストシネマ有楽町 劇場 HP / 劇場窓口で購入

券種	前売券	会期中券
料金	一般　1,500円　U-25割　1,100円	一般　2,000円　U-25割　1,500円
販売期間	11/2(土) PM 12:00〜11/22(金) 19:00	11/23(土) AM 10:00 〜
取り扱い	ヒューマントラストシネマ有楽町	

劇場HP：https://ttcg.jp/human_yurakucho/
座席選択可能。購入・発券手数料は0円です。(QRコード提示で入場可能)
特別興行のため、TCGメンバーズカード、各種割引およびご招待券などはご利用頂けません。
東京都では18歳未満の方は23時を過ぎる上映回には保護者同伴であってもご入場頂けません。

■チケット購入に際しての注意事項

チケット取り扱いは会場ごとに異なります。
平成11年1月1日以降生まれの方を対象としたU-25割チケットがございます。
当日会場にて年齢確認をさせていただく場合がありますので、年齢を証明できるものをお持ちください。
完売した上映回であっても、状況により追加販売を行う可能性がございます。
チケットの払戻、交換、再発行はいたしません。また、当日にチケットをお持ちでない方は入場できません。チケット・最新情報詳細は映画祭公式サイトにてご確認ください。
障がい者手帳をお持ちの方はU-25割が適用されます。(付き添い1名様まで同料金でご購入いただけます。ご入場の際に、障がい者手帳をチケットと一緒にご提示ください。)

今だけ！スクリーンで東京フィルメックス25年の軌跡(11/15-11/21)

プレイベントチケット 11月7日(木) 16:00pmより発売！

会場／ヒューマントラストシネマ有楽町　シアター１or2（有楽町イトシア・イトシアプラザ４階）

購入方法：ヒューマントラストシネマ有楽町 劇場 HP / 劇場窓口で購入

券種	前売券
料金	TCGメンバーズカード　1,400円 一般　2,000円 大学生　1,500円 / 高校・中学・小学生　1,000円 / シニア　1,300円
販売期間	11/7(木) 16:00 PM〜
取り扱い	ヒューマントラストシネマ有楽町

TCGメンバーズカード、各種割引もご利用頂けます。
詳細は公式サイトの「チケット」ページをご確認ください。